
恋姫†無双 ～ Symbolic of the Hope ～

黒衣を纏う執行者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫†無双 〜Symbolic of the Hope〜

【Nコード】

N0180Y

【作者名】

黒衣を纏う執行者

【あらすじ】

アニメ版『恋姫†無双』と特撮ドラマ『牙狼』を混ぜた、自称『異色』の二次創作。
主人公『大神牙狼』が『関羽雲長』一行との出会い。

序章

——輝^{ヒカリ}在る処に陰在り。

——ヒトは生まれし其の時から、闇を、陰を恐れた。

——その陰を地獄の門として顕現せしケモノ、その名は『魔獣』。

・・・そしてそれは、乱れしこの先史——二世紀の末でも同じ事だ。

「ハアッハアッ・・・っ!!」

ほら、今この時も、陰から顕れた『魔獣』に追われる一人の可哀想な子供がいるだろ？

こんな夜遅くに外を出歩いているなら、正しく『魔獣』の格好の餌なようなモンだ。

しかも運が悪い、アイツは『幼子の魂』を喰うのが好きな『魔獣』みたいだ。

・・・お、子供の方の動きが止まったな。大方、足が纏れてすつ転んだんだろなあ。

「嫌だ・・・イヤだよお・・・!!」

『G u a a a a a a ! ! ! !』

「ヒイツ・・・!!」

あゝあ、とうとう追いつかれちゃったな。

夜闇に溶ける黒い体皮に醜悪な体躯を持った『魔獣』が、ヒタリヒタリと歩みを進める。

目の前の木の幹には、お目当ての『魂』を持った器「トモ」が転がっている。後は近寄って、バクリと殺っちまうだけなんだろうが・・・――

——まあ、『そうは問屋が何とやら』、ってな。

『……G U U U』
「……?」

怯えきつた子供が伏せていた顔を上げると、今度は『魔獣』の方が
ビクついてるじゃあないか。

奴の視線は、ある一点の方向に注がれている。

——夜闇を照らす、眩い金色の光に。

——その刹那。

ズシャアッ！！！！！

《G i a a a a a ! ! !》
「うわぁ!!」

『魔獣』の軀を何かが薙いだかと思ったその時、その漆黒の体軀が爆ぜた。
爆ぜて飛び散った肉片が、子供の体に降り掛か――、

「――ハッ!!」

――らなかった。
光だと思っていたのは、満月の光を受けて黄金に輝く、『鎧』。
そして肉片は、その鎧を纏った者の一閃により、一欠片も残さず塵へと還る。

「・・・大丈夫か？」
「へ・・・あ、はい・・・」

余りに非日常的な光景を目の当たりにし放心している子供に、鎧の主が優しく声をかける。

その瞬間、鎧が主の軀を離れて金属の塊へ変わり、男の頭上の光の環の中へ消えてゆく。

男はそのまま子供を背に背負うと、その足を子供の家のある村へと向ける。

――闇夜に潜みし『魔獣』。

――先史の時代よりそれを狩り、世に太平を為すが為に剣を振るう者ありけり。

――夜の闇でさえ、その者の前では掠れて見える程の輝きを放ち。

――繰り出す剣閃は、闇を断ち切る一条の光。

――影なりぬれど、陰を斬り裂く『光の象徴』。

彼の者の名は『大神』、字は『あぶな牙狼』。

これは、先史の混迷した世を陰から護る、一人の『黄金騎士』の物語――。

第零席 自己紹介をすること

大神 字『牙狼』 真名『鋼牙』

武器『魔戒剣』？『牙狼剣』？『牙狼斬馬剣』

武装『黄金の鎧』『魔戒馬・轟天』『鷹麟の矢』

『魔獣』を狩り、太平の世を築くべく、各地を放浪している旅の武者。

元は呉の出身で、孫家と親交があり孫権とは同じ学問所の幼馴染。冷たい視線と風貌とは裏腹に、穏やかで飄々とした性格で、正義感
は並み以上。

他人からの好意に疎く、割と初心。

が、賊や『魔獣』には一片の容赦もせず、磨いた剣技と体術で冷酷
にねじ伏せる。

『鎧』や『魔戒剣』は管輅から与えられた物であり、剣術・体術・
妖術等といった

『魔獣』との戦いの術も教えられた。

しばしば管輅から課される、珍妙だったり過酷だったり、
割と真剣な試練^{マジ}を受け、辟易している。

剣術に秀でているが、管輅からの教えと自己研鑽と訓練で剣舞を修得しており、

その舞は周囲の者達を引き込む魅力と鋭さがある。

ザルバ「・・・と、まあこんなモンか？」

大神「こんなモンって・・・お前の紹介はしなくていいのか？」

ザルバ「俺は只の魔導輪だ・・・お前の志に従う、な？」

大神「ちやつかり『魔導輪』って名乗ってる・・・よな？」
「-」

ザルバ「とにかく、これから牙狼の物語が描かれ始める訳だが・・・その前に、

ドラマ『牙狼』の簡単な説明をすべきだな」

大神「『牙狼』だけじゃなく『恋姫†無双』の方も説明すべきだと思っんだが？」

ザルバ「この小説サイトにアクセスしてるなら、アレみたいな濃いネタも

知っているだろうから、説明は省くぞ」

大神「いいのか・・・？（汗）」

ザルバ「（無視）特撮ドラマ『牙狼』は、スタント無しのカヤスト
オンリーの戦闘シーンや、

ハイクオリティなVFXが秀逸な『大人』の特撮だ」

大神「俺の字の『牙狼』は『ガロ』って読んで、魔界語で『希望』
を

意味するんだ、覚えててくれよな」

ザルバ「因みに俺の名前は『友』って意味だ。併せて覚えてくれ」

大神「それじゃ・・・」

ザルバ「第一席で会おうぜ！！」

この作品では、『ザルバの人格』は出てきません。指輪本体のみ
の登場です。

ザルバ「なん・・・だとお！？＼（　○　）／！」

大神「ドンマイドンマイww（＾Д＾）」

第一席 大神、関羽達と出会うのこと ↑執筆中

「昨夜はこの子がお世話になりました・・・」

「ありがとね、大神さん!!」

「いいですよお礼なんて・・・久しぶりに屋根のある所で寝られて
丁度良かったですし」

「じゃあねー!!」

「おう、もう夜中に歩くんじゃないぞー!!」

昨日の夜助けた子供とその母親に見送られ、村を出る。これからは
村長達が夜間の外出禁止を徹底するみたいだし、『門』になりそう
な場所に封魔符を貼っておいたし、これで大丈夫だろう。

しかし・・・最近増えてきたな、『魔獣』に襲われる連中が。
やっぱりこれも、賊がやたらと跋扈してたり、相対的に治安が悪く
なったりして、人々の間に『怨嗟』の感情が沸き起こっている為な
のか・・・？

「・・・そっちもどうかしなきゃ、だな・・・」

『魔獣』を狩り、世に太平をもたらすのは俺の使命。
そして最終的には『平和な世を築く』のが俺の天命。

・・・やっぱり、どっかの国に就いて仕えるのが一番なのか・・・？
・・・仕えるんだったら、やっぱり孫家だが・・・気楽な方が・・・。

「むむむむ・・・」

——結局、俺は流れの『魔戒騎士』の方が性に合ってるんだなと、
再三自覚することになった。

「第一席　大神、旅路を征くのこと」

「・・・お、分かれ道か」

二つに別れた道で立ち止まり、一旦地図に目を移す。
手に持った地図は、もうボロ切れ同然に劣化している。後で街に行
って新しいのを買い求めないとな・・・。一体どれ位長い間使っ
てるかって？　そうさなあ・・・かれこれ5、6年って所か？

「・・・こっち、だな」

それなりに大きな街でないと、新しい地図はそうそう手に入る物じゃない。一先ず、一番近くの街へと足を向ける事にする。

——勿論、『門』になりそうな所は封印しながら、な？

（一時間後）

「・・・・・・・・・・うん、迷ったな」

この前寄った街で地図を買わなかったのが仇になったようだ。既に日が暮れたつてのに、俺はまだ森の中を歩いていた。はてさてどうしたモンかなつと・・・・・・・・。。

「・・・・・・・・お？」

ふと、視界の先に焚き火の明かりが写る。パチパチと薪が弾ける音も一緒に聞こえてくる。

『渡りに船』とは、正にこの事だな。．．．ありがてえなあこりや。

「すいませ——」

ん、と言いかけるも、その先は——、

「ひゃあああああああ！！？」

——焚き火の目の前にいた小さな女の子の悲鳴に、かき消されてしまった。

何事かと思ひ咄嗟に剣の柄に手をかけるも、その女の子は木の影へ隠れてしまう。

．．．．．もしかしくなくても俺、怖がられてる？

そりゃまあ．．．．．全身黒ずくめで、こんな暖かい季節だって

のに外套なんて羽織って、顔も碌に見えないのは自負してるけど・
・そんな明白あからさまに怯えられると痛む、主に胸が、特に心が。

という訳で、取る行動は自ずと二つに限られる訳だ。

「別に怪しい者じゃな「怪しい人は皆そう言うんですっ!!」」・・・
「ダヨナー」

・・・第一案『冷静に話す』は、敢無く失敗。まあ当然だわな・・・
・そりゃ、しつかり得物に手をかけて弁明したって説得力に欠ける
って話になるよな・・・言ってる哀しくなってきたぞ、オイ。

てな訳で、第二案を実行する事にしよう。というより、最初ハナからこ
っちをやった方が良い気がしてきたぞ・・・。

いたたまれない気持ちに苛まれながら『魔戒剣』の収まった鞘を腰
布から外し、脱いだ外套にくるんで地べたに置く。そしてその場に
座り、一言。

「・・・疑わしい風貌で済まない。道に迷った所で――」

「――孔明殿、待たせてしまって・・・？」

・・・今日の晩はよく話が被るな。何度目だよ・・・って二度目だよ・・・。

「大神、事情やらその他諸々を説明中につき、暫くお待ち下さい」

「——という訳で、旅をしてるんだが」

俺の『力』については話さなかったが、世の乱れを鎮め太平の世を取り戻す為に旅をしていると伝えると、偃月刀を持った黒い髪の女性はいさかい女の子の方を諭して、場を収めてくれた。

「実は、私も世に太平を築く為に旅をしている途中なんだ」

「へえそりゃ奇遇だな・・・おっと、まだ名乗って無かったよな

「？」

「私の名は関羽、字名は雲長だ」

「私は諸葛亮、字名は孔明と申しますっ」

さっきの取り乱し様とはうって変わって、落ち着いた表情で名を告げる孔明と、折り目正しい態度の関羽。・・・個性的な二人と出会ったモンだなこりゃ。

・・・・・・おっと、俺も二人にしっかり名乗っておかなきゃな。

「俺の名は大神、字名は——『牙狼』だ!!」

「・・・・・・」

関羽と孔明の二人と出会い、少々夜更しをして互いの事を語り合った夜から一夜が明けて。朝の日差しで目を覚ますと、既に関羽は起きていた。

起きていた、の、だが。

「関羽、どうした？」

「ん？ いやぁ何でもない、何でもないぞ大神殿！」

「・・・（じ・・・）」

おかしい。何がおかしいって、関羽の様子が明らかにおかしい。妙にソワソワしているというか、浮かない顔をしているというか、そんな感じだ。

昨日の凜とした目が、よく晴れた虚空を見つめてボーっとしている。ついでに表情も、だ。

「ふぁ・・・おはようございまふう」

「お、おはよう孔明さん」

「ん……『孔明』でいいですよ……」

（もしかしたら関羽がぼーっとしている理由を知っているかもしれない）

・・・起きたてでまだ眠そうな状態じゃ、聞きだせそうにもないか。まあ「急いては事を仕損ずる」なんて大仰な諺があるからな、完全に目え覚ますまで気長に待つか……。

（5分後）

「——えっ 関羽さんの様子がおかしい？」

「今朝からな、やけにボーっとしてるんだが……」

川へ顔を洗いに行くのを口実に、関羽のいない所で本題を切り出してみる。と、途端に孔明の表情が曇り出す。・・・やっぱり何かあ

ったようだ。

「・・・近くで寝たのが、そんなに不味かったかな・・・」

「いついえっその、大神さんの所為とかじゃ——」

「あと俺の事は『牙狼』って呼んでくれよう？」

「はうう・・・その、牙狼さんの所為ではないんです・・・・・・
鈴々ちゃんが」

「??」

今まで聞いたことのない名前を聞いた。が、今はその名前の人物の事を訊ねるべきではない。

孔明が、浮かない表情で、話をしだした。

関羽には義姉妹の契りを結んだ仲である、鈴々こと『張飛』という女の子と一緒にいたそうだ。

が、ここまで来る途中でちよつとした揉め事——分かれ道をどの方向に行くかで揉めたとの事——を起こして、そのまま喧嘩別れをしてしまったそうな。

「・・・でどうしようか悩んでた時に、俺がひょっこり出てきました、と」

「そういう訳で・・・」

「ん・・・」

問題は、非がどちらにもあるような無いような、そんなもどかしい状態であるという事だ。

話だと、その張飛って子が行く道を根拠皆無の占いで決めようとしたのを、関羽が叱ったのが事の発端のようだ。そこで関羽が矛を収めれば良かったのか、それとも張飛が引いていれば良かったのかは判断し難い・・・。

「一先ずその張飛って子を探さないと謝る事も出来ない・・・ここからだとの位だ？」

「あの分かれ道からここに来るのに、昼の明るい時から夕方頃までかかってしまいましたから・・・かなり距離が離れているかと」

「そうか・・・今から行けば昼頃には着けるな」

「では、関羽さんと呼んできますね！」

ポケーっとした関羽を立ち直らせ、孔明に加筆をして貰い幾分見やすくなった地図を頼りに、目的の分かれ道へと歩みを進める。

「……ん、何でまだあのオンボロな地図を使ってるのかって？ くれた奴が「勿体無い事するな」っていじけるんだよ、『古くなった』って言って捨てちまうとな。」

「……ココだけの話、外套も古着屋に売っちまいたいんだよなあ。」

「——いないな」

「いませんねえ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180y/>

恋姫†無双 ~ Symbolic of the Hope ~

2011年11月16日18時44分発行